▲ 入側（広縁）越しに上之間を見る

▲ 入側（広縁） 畳敷き、棹縁天井で、壁は土壁上塗り仕上げ、建具は腰障子引き違いである。

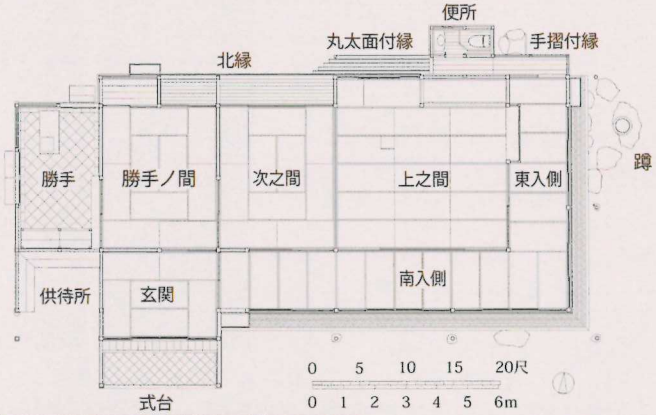
▲ 北面丸太面付縁、北縁越しに上之間、次之間を見る

所在地　〒485-0046 小牧市堀の内一丁目２番地
問い合わせ先　小牧市青年の家　TEL　0568-76-3718
写真・文：麓 和善（名古屋工業大学名誉教授）令和６年３月発行

【創垂館の平面構成】

主屋は、桁行８間、梁間４間、寄棟造、桟瓦葺で、南面西寄りに「式台」、西面に「供待所」・「勝手」、北面東寄りに「便所」が突出する。

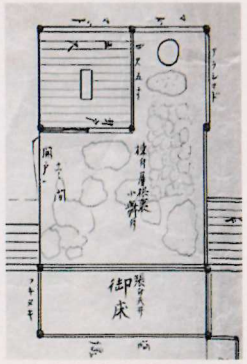
間取りは、南西隅に叩き土間で腰掛付きの「供待所」があり、その東に染付タイル敷き土間の「式台」と６畳の「玄関」が南北に並ぶ。玄関の東面から畳敷きの「入側」（広縁）が東に延び、東端で北に折れる。入側の外側には竹縁が付く。南入側の北側、東入側に接して床と付書院の座敷飾を備えた16畳半の「上之間」があり、西に向かって10畳の「次之間」、押入付き10畳の「勝手ノ間」、タイル敷土間の「勝手」が並ぶ。上之間の北面には「手摺付縁」、「便所」、「丸太面付縁」が接し、「次之間」から「勝手ノ間」にかけての北面には「北縁」が接する。昭和24年移築時に、地形に合わせて便所の規模が縮小されたが、それ以外は令和の保存修理工事において、ほぼ創建当初の姿に復原された。



▲ 平面図

【創垂館の価値】

創垂館は明治21年（1888）に建設されたので近代和風建築であるが、上之間の床は黒漆塗の框床、付書院は竪繁格子の障子４本引き違い、上之間と次之間境の欄間は筬欄間で、これらは近世の書院造の伝統と格式を踏襲したものである。ここに創垂館の建築的特色があり、愛知県の迎賓館として建設されたものの、翌年の尾張徳川家への払い下げを見越して、徳川家の迎賓館として建設されたためと考えられる。史跡小牧山にふさわしい文化財としての価値を有しているといえる。



▲「小牧山御殿平面之図」便所部分
（小牧市教育委員会所蔵）

▲ 次之間から上之間、入側（広縁）を見る

▲ 入側（広縁）から蹲を見る

蹲、竹縁と入側を見る ▶

▲ 上之間　北面東半に間口一間半の黒漆塗りの框床があり、その右手（東側）には間口一間の付書院が付いている。